

---

# たなたな

マグロ頭

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

たなたな

### 【Nコード】

N4055C

### 【作者名】

マグロ頭

### 【あらすじ】

真夏の太陽。焼ける肌。うるさい人々と夏が大嫌いな私。地獄のようなバイトを怒りで乗り気って、夏の一日は終わっていく。

日本にも灼熱砂漠があるとは思ひもしなかった。

真夏の海水浴場。私は声を大にして、懸命に客寄せをしている。雲一つない快晴の空。力強く照りつける太陽。日射しは容赦なく大地に降り注ぎ、一面の砂浜は天然のフライパンになっている。

きつと目玉焼きぐらいなら砂の上で作れるのだろう。割って落とした瞬間に、ジュウジュウと美味しそうな音をたてて、うまい具合いに半熟になる。絶対に、きつとなる。その後、目玉焼きを食べるかどうかなんてことは知ったことじゃないが、それくらい暑いのは確かだった。

人が浜辺にところ狭しとひしめきあっている。右を見ても左を見ても人、人、人。どこにいても人の声が響いてくる。暑さで脳みそが溶けてしまったのだろうか。奇声をあげてはしゃいでいる。人間公害。その名がぴったりだと私は思った。

夏。弾ける季節。水に遊び、肌をさらし、暑く駆け抜ける季節。

私はこの季節が大嫌いだった。

暑いのが嫌い。日に焼けるのが嫌い。うるさいのが嫌い。もう夏という存在が嫌い。大嫌い。夏なんてなくなればいいのに。中学生の頃本気で悩んだことがある。

だから今、私の心中は穏やかではなかった。この暑さに、この海の喧騒に、私の機嫌は斜めを通り越して垂直になっていたのだ。もう間っ逆さま。不機嫌なんてそんな甘いもんじゃない。怒りだ。怒りが私を包んでいた。

そもそも、どうして私はここにくることになったのか。なぜ私が、夏になると死にたくなるようなこの私が、海の家のお客引をしているのか。

私は、昨夜携帯電話の向こうで、この拷問のごときバイトを私に押し付けてきやがった糞女のことを憎々しく思った。出来ることな

ら今すぐにも鼻っ面にパンチを放ってやりたい。

不快だ。あまりにも不快だ。きつとあの女は、今頃“カレシ”と一緒に遊園地ではしゃぎ回っているのだろう。昨夜の声には隠せない（隠すつもりなど未塵もなかったのかもしれない）幸せが満ち溢れていた。

「なんかさ、急にカレシがチケット取ったとか言い出してさ。ホント困ったんだけど、折角取ってくれたんだし、行かないや悪かなって思って。だからさ、悪いんだけど、代わりにバイト行って」

はあ？ 私の頭はこの時女の言葉を理解できていなかった。こいつは私が夏が死ぬ程嫌いなことを忘れてしまったのだろうか。それとも、もう老化が始まって呆け始めてしまったのかしら。そんな要らぬ心配をしてしまった。

「てかさ、あんたさ、夏嫌い嫌い言っつて、ずっと引き込もつてたらもつたいないよ。あんた美人なんだからさ。だ〜か〜ら〜、真夏の海で恋の一つでも見つけなさいよ。あんたなら男の方から来るからさ。モテモテよモテモテ。羨ましいわあ。あたしじゃ絶対有り得ないから。ね、てなわけでさ、お願いね。場所は後でメールするから。じゃ〜ね〜」

私が一言も言うことなく電話は一方的に切られた。まだ状況が理解出来ていなかった。後でと言っていたメールは、その三分後に届いた。混乱していた私には、カップラーメンが出来るまでの間に抗議するという選択肢はまるで考えもつかなかったのだ。突然の展開に弱いのだ。

しかし、今は真摯に思う。

糞喰らえ。お前は前々からカレシと一緒に遊園地に行きたいって大っぴらに言いふらしていたじゃないか。恋の一つでも見つけなさい？ 何様だお前は。私の母親か。いや母親でもこんな失礼なことはずいぶん言っただろう。私に分身のつもりなのか。ふざけるな。アホ。ボケ。間伸びする声を出すな。耳が腐る。なぜかいきなり着



った。ふん、どうせ私は一人ものですよ。ええ、一匹狼ですとも。それがなにか。悪いのですか？

一方的に開き直って、私はもうバイトだけに専念することにした。叫んで微笑んでまた叫んで。私の喉はガラガラに、真っ赤な肌はヒリヒリしていた。

夕暮れ。仕事が終わり一人砂浜に座る。あの熱さが嘘のように砂浜は冷えていた。海を眺める。太陽がゆっくり沈んでいく。染まる波際。静かな潮彩。今日の終りにびつたりの景色だ。そう思うことにした。

ピタリと冷たい物が頬に触れた。悲鳴をあげてしまった。

「お疲れ」

隣にいたのは今日一緒にバイトをした男の人。短い髪と小麦色に焼けた肌が夏にはびつたりの人だった。

「今日代わりで来たんだってね。どう、結構辛いつしょ」

そう言っただけは意地悪そうに笑った。プシュッとプルを引いて、ビールを飲んでいく。リズム良く上下する喉仏に、なんて美味しそうに飲むんだろうと感心してしまった。

口を離した彼が不思議そうに私を見てくるまで、私はずっと彼のことを見ていた。

「あ、あの、夕陽綺麗ですよ」

あら、不自然。顔から火が吹いた。

「夕陽？ ああ、うん。すっごく綺麗だよ。僕さ、ここで何年かバイトしてるけど、こんなに綺麗な夕陽を見たのは初めてかな」

私は出来るだけいつも通りの私を装って、へえー、そうなんだあ」と感心した。ふーん、ここで働いてるんだ。私は再び海を見つめた。太陽はその半分をすでに海に沈めていた。

確かにとっても綺麗だ。

私は穏やかになる心を感じながら、沈み行く太陽をじっと見ていた。彼もまた私の隣に座っていた。

浜辺に伸びる二つの陰はとても優しかった。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4055c/>

---

たなたな

2009年3月24日10時17分発行